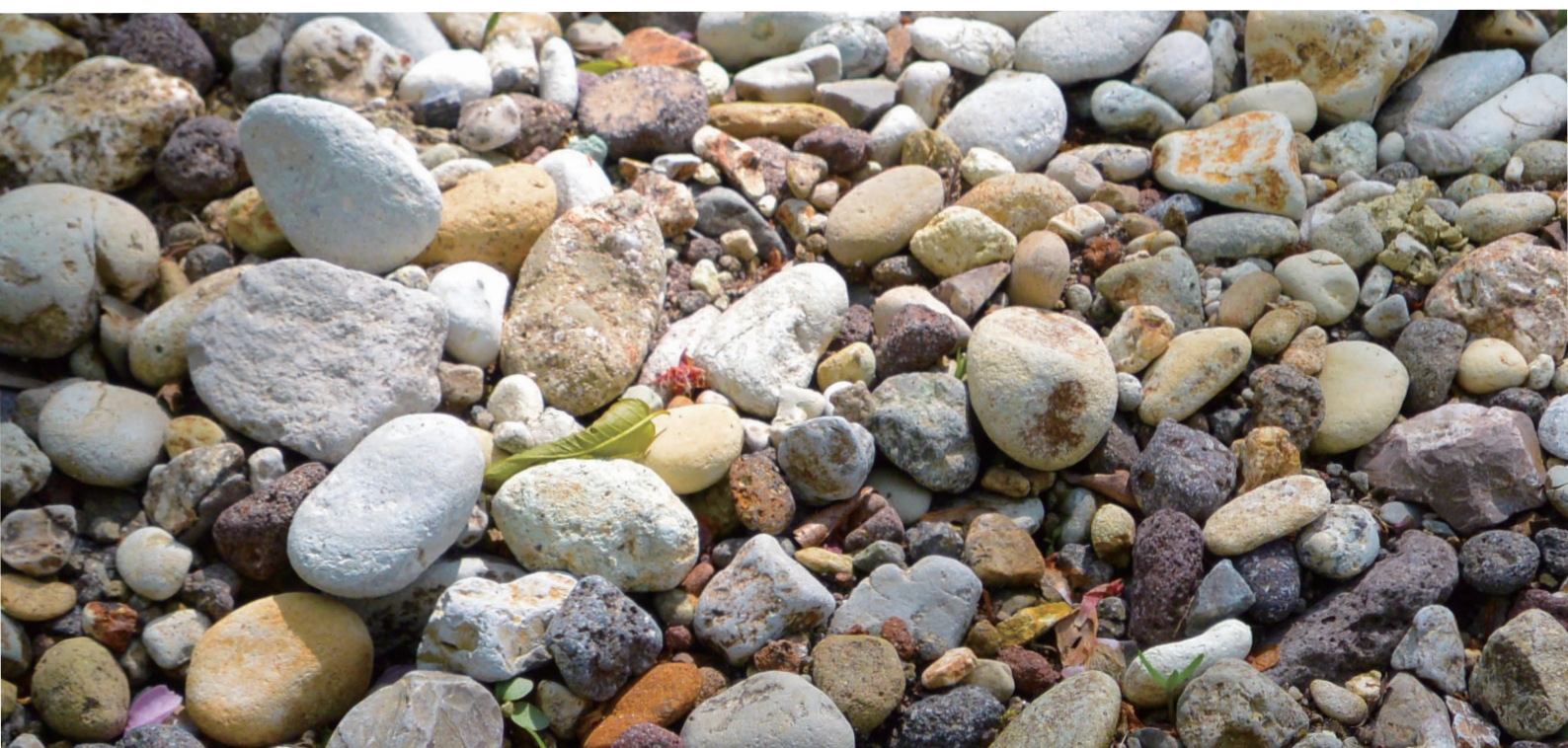


東北芸術工科大学 デザイン工学部

# 建築・環境デザイン学科 年報2014

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2014



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY  
OF ART & DESIGN



## はじめに

---

震災から3年目を迎え、それぞれの被災地は一見、平穏を取り戻したかのように見えます。私たちの関わっている気仙沼大沢地区でも少しずつですが、確実に生活は変わってきました。でも、仮設住宅はまだそのままです。防潮堤もところどころででき始め、その大きさや高さに目を奪われてしまいます。ただ、そういう変化が見られない地域が原発による被害を受けた福島です。そこではあたかも時間が止まったようになっていて、状況すらも正確に伝えられようとしません。果たして、そこに住み続けられるのかどうか、放射能に対してどう対処したら良いのかわからないというのも事実です。

そういう中で私たちはなにをしたらよいのでしょうか。その地域から距離をおくのもやり方の一つだと思います。とはいえ、すべての人が避難できるわけではありません。反対に、何も気にしないで、今までどおり過ごすという手もあるかもしれません。その方が波風立たずにいいと思うかもしれません。

こういう時代で一番やってはいけないのは、情報を遮断することだと思います。情報を遮断すると、思考の幅が小さくなり、何も考えられなくなっていってしまいます。色々な意見を聞くのは大変ですが、その過程で相対化され、何が大事なのか、自分の頭で考えられるようになってきます。現代ではインターネットという便利なものがあり、たいした手間をかけずに、情報を得ることは可能です。ただ慣れていないと却って混乱してしまいます。情報を得た上で、自分ごととして考え、さらにもう一歩前に踏み出す必要があります。それは社会にはいくつもの視点があって、そのそれぞれに意味があります。様々な意見には、それを成立させる様々な状況があって、意見そのものが分かれています。でも、その多くの意見は、それぞれが違い、また、たくさんあるほうが健全で、自分がどう考えるかということが大切なのだと思います。

さて、さらに、知った上で今までどおりの「日常」をどう過ごすかがとても大事なことだと思います。日常とは、朝起きて、おはようといい、食事を摂り、働き、友人と語り、遊びにも行く。そういうことです。そういうことの積み重ねの上に、新しいことを積み上げる努力が必要です。震災から3年経った今、すこしずつあるべき姿に向かって、淡々と積み上げていくものではないかと思っています。

必要なのは闇雲に何かをすることではなく、いくつかの確かな知識と実践に基づいた技術です。そういう技術を大学は提供したいと思っています。私たちは、住環境、それを取り巻くまち、さらに地域などをどうしていくかの技術を受け持ちます。そして、その技術を一人でも多くの人に伝えたい。それがあれば、色々な個人の問題だけでなく、社会の様々な問題を解決できると思います。「新しいふるさと懐かしいみらい」にむかって進んでいきたいと思っています。

## 目次

---

## 特集

---

今年の特集はリノベーションです。一般的にリノベーションは建物単体の改修のことが多いのですが、今回はエリアリノベーション。ある面的な広がりをもつ地域のなかで、小さな建物が、一つ一つ変わることによってエリア全体の変化を促すことを目論みます。この手法は清水義次氏の著書「リノベーションまちづくり」にも紹介されている方法で、以前に馬場や竹内が関わっていた「セントラル・イースト・トーキョー」での体験が下敷きになっています。単体ではなく、エリアを変えていく。建築だからこそできる「まちの使い倒し方」ぜひ、ご覧になってください。

---

新しいふるさと、懐かしいみらい 6

---

リノベーションスクール@山形 8

---

## 教育報

---

年4回のスタジオが中心となって、カリキュラムが組まれています。特に3年生は4、5種類の中から一つ選ぶことができます。そうすることで、各々の興味や進路に合わせた計画を立てることができます。

建築の分野の学びは広く深い海のようなものです。そこをどう通るかは学生の意思に任されています。建築を続けて取るもよし、ランドスケープを続けて取るもよし。あるいは、横断的に様々な分野をとるのもよし。4年生のゼミ活動に関しては、学生が取り組みたいそれぞれのテーマに合わせて、ゼミごとに、さらに中間講評会など、全員の教員で見ることになっています。

---

1学年 建築・環境基礎演習 10

---

インテリア基礎演習 11

---

建築・環境施工演習

---

---

2学年 フィールドワーク入門 12

---

現代の茶室 13

住宅の設計

---

スタジオ別演習課題 14

mono marché

食と農のまちづくり

自転車のための環境デザイン

歴史と調和する小建築

---

3学年 まちのなかに住むかたち 15

近自然工法による空間デザイン

---

スタジオ課題 16

こどもたちのまなびば

蹟(もがり)の森を再現する

エコハウス

素材と風土で考えるギャラリーの設計

---

エントランスのリノベーション 17

建築の遺伝子

ニュータウンのリノベーション

---

カフェでリノベーション 18

クルマ社会のリデザイン

---

スタジオ課題 19

設計のための地域条件解説

まちの自然エネルギー計画

建築とFORM (フォルム)

劇場と広場

---

人口減少社会の公共施設 20

中山間部集落の風土的なくらしの地域計画

---

スタジオ総評

---



卒業研究	地域で暮らす 緩やかにつながる庭	21	プロジェクト	28
	すぐ近くの里・まち交流	22	大江町国選定重要文化的景観の保存計画に基づく建築調査 小屋づくり	
	総評と傾向	23	奥会津地方三島町早戸地区石積実習活動 蔵プロジェクト	

## 研究報

教員が学生といっしょに、地域に対して様々な活動を行っています。一つ一つも興味深いですが、全体を通して見ると学科のスタンスが見えてきます。地域に寄り添って問い、答えをさがし、それを建築やランドスケイプなど専門的な技術で応えます。その問いと答えがセットになっているのが建築・環境デザイン学科の強みであると考えています。実はこれらのプロジェクトには単位が付きません。社会での活動は社会で何をすべきか学ぶところで、単位のつく授業の対象にすべきではないと考えています。授業という大義名分で、熱心じゃない学生が地域に出向き、その地域に迷惑をかけたくはないのです。

各種講演会 執筆活動	29
「環境的未來型」 畠山直哉氏講演会 「ONE DAY PROJECT」 蟻塚学氏講演会	
2025年の建築「新しいシゴト」 日本のカタチ2050	30

高島町ワクワクまちづくり協議会 気仙沼みらい計画大沢チーム	24
TRST 東日本復旧復興計画支援チーム タウン・ワークス	25
北海道江差町「職人蔵」 セルフリノベーションプロジェクト ツリーハウスプロジェクト	26
山形R不動産 中学生のためのワークショップ	27

## 新しいふるさと、懐かしいみらい

### キャッシュアウトしない経済

「新しいふるさと懐かしいみらい」は、東北の新しいまちのモデルとして提案されました。現在、日本のエネルギー自給率はわずか4%足らずです。そして、そのほとんどを化石燃料の輸入に頼っています。その状況のなか、日本の総エネルギー量の33%は建物で消費されています。運輸や産業や農業、漁業など様々な分野がありますが、温暖な国でありながらかなりの量を使っています。その総額、毎年23兆円。これを減らしていくことは国家戦略的にも重要なことです。こういうお金が流出していくことをキャッシュアウト（資本の流出）といいます。

### 健康への配慮

一方、日本の家が寒いため、年間17,000人もの人がヒートショックで命を落としています。暖かい居間からでて、寒い廊下、洗面室で着替え、熱い風呂に入る、その一連の動作で心臓への

負担がかかり、血流にトラブルが発生するのです。断熱性能が弱い家では、リスクが常に付きまといます。また、これから、人口減少が進むなか、家のエネルギー需要経費も減らざるを得ないと思われます。

### 森林資本主義

東北には豊かな森林があります。その森林の材木を使って家を建てると、幾つものいいことが起こります。まず、家という高額商品を提供できるので、トータルの利益が大きくなります。材木を製材するときにもでた端材は燃料になります。この燃料が地元産のものだと、その地域から資本の流出（キャッシュアウト）しなくなります。また、その地域の工務店は継続的に地域をかかわる必要があり、産業振興できるので、むしろ外貨の獲得（キャッシュイン）ができるようになります。一見、のどかそうに見える風景もそれを成立させているシステムがき





ちんとあるのです。建てられる家はエネルギーをできるだけ使わない家です。それは結果として、非常に快適な家になります。材料は木造、そして、性能は最高。コンパクトに集落をつくることでより集落としてのエネルギーの効率化も図れます。

#### ローカリズムの時代

これらのストーリーは人口減少社会においても、政府の財政がうまくいなくても、地域の住民たちの意思さえあれば、少しずつでも前進できます。自分たちで考えて、自分たちで行動する、現在ある資源をつかって、それらを回すことで豊かになっていく。いつの間にか、エネルギーの話が豊かな未来の話になっていることがわかっていただけたら幸いです。そういう地域の関係のなかに私たちは生きているのです。そして、これらは海外との貿易を前提としたグローバリズムの反対語として、ローカリズムと言われています。





## リノベーションスクール@山形



対象地1 まなび館 (外観)



対象地2 ミツマスビル (外観)



対象地2 ミツマスビル (内観)

### 官学連携の実践プログラム

山形リノベーションスクールとは、東北芸術工科大学と山形市が共同で行う官学連携の実践的教育プログラム。

山形市の中心市街地七日町の中から空き物件を三棟ピックアップ。そのリノベーション計画を2泊3日、参加者のワークショップ形式により行った。このスクールに参加したのは山形市内からだけではなく、仙台を始め東北各県および関東からの学生や社会人。実践的なリノベーションの方法論を学ぶために、広域から専門性の高い人材が集まった。講師陣も現在全国で活動する建築家やリノベーション事業を行う実践者たち。彼らのノウハウを山形市街地にも多数残る空き物件の再生プログラムに援用し、山形の活性化につなげていくのがこのスクールの目的だ。

### 3タイプの建物をリノベーション

15人が3つのチームに分かれ、エリアの調査、マーケティング、企画、デザイン、事業収支、プロモーションに至るまで横断的にリノベーションプログラムを作成した。

一つは20年間空き続けていたオフィスビルの再生、一つは道路に面した1階部分が店舗、2階が今住居のビルの一部、もう一つが旧第一小学校跡地で現在は「まなび館」と呼ばれる山形市が所有するコミュニケーションスペース。規模も形態もバラバラの3つの建物が対象となった。

### 再生のストーリーの始まり

最終日には建物のオーナーを招待し、彼らや行政担当者に対して本格的なプレゼンテーションを行った。その内容に心を動かされ協力したい、と申し出るビルオーナーもいた。

またこのスクールを通し、自分の可能性ややるべき事業の姿を具体的に発見し、実践の第一歩を踏み出す決心をする受講者もいた。彼らは一方踏み出す手がかりのようなものを求め、このスクールに参加していたようだ。

そのような意味でこのスクールの大きな特徴は、実践的な人材を育てると同時に、事業に共感するオーナーを発見し、再生のサクセスストーリーをつくることにある。

現在、その時提案された企画案をベースにして、いくつかのビルやチームが実践に向けてプロジェクト動かし始めている。



対象敷地3 傘屋 (内観)



対象敷地3 傘屋 (外観)



リノベーションスクール@山形 集合写真

### 新しい都市計画の方法論

この山形リノベーションスクールの方法論は、翌年には仙台市、鶴岡市などの東北の他のエリアにも拡大して動き始めている。単なるリノベーションのスクールではなく、新しい都市計画の方法論として注目を集めるに至っている。

また、山形市と東北芸術工科大学との共同事業として、官学連携のモデルタイプを示している。



1学年 建築・環境基礎演習

本学科入学最初の演習課題は、初めての实技経験として基礎的な発想や技術を育て磨く大切な機会である。芸術系大学でありながら、自らの手で描くという経験や技を体得する機会が乏しいという指摘は従来からあったが、今回これを受けて改めて鉛筆によるデッサン、クロッキー及び簡単な立体造形を短期で制作する演習課題を設定した。

7週の課題では、木パネルへの水張りから始まり、前半ではグループ毎にモチーフ台を囲んで、基礎立体、その複数の組み合わせ、形状や素材の違った生活備品をモチーフとした鉛筆デッサンの反復実践。後半では、屋外へ出て、樹木と風景のスケッチ描写。後半はグループ内学生が交替でモチーフ台に上がっての人物クロッキー、モデルを派遣してのヌードクロッキーを設定。また大版ケント紙による立体物を制作する立体構成課題を課した。

基礎的なデッサンやクロッキーは、単に上手く描くことを目的とするのではなく、モチーフを丁寧に観察して特性を理解し、的確に描写表現することを目指す。これは転じて建築や環境をデザインする際に敷地や周辺環境などと向き合う際のものの見方や捉え方に応用される基礎力を養う意味もある。また短期の基礎立体制作は、完成した姿を想定しながら立体物を構想して設計し、自らの手を動かし完成形に導く一連の実設計行為の凝縮された取組みの体験でもある。すなわちその全てが先々の演習課題につながる、まさに「基礎演習」となっている。

(志村直愛)



描くことの楽しさから描き方のポイントまでを解説



基礎立体を繰り返し描く練習



紙で立体物を制作する・その講評風景



屋外で木造建築物を写生する



## 1学年 インテリア基礎演習

入学して最初に取り組む設計課題では、一番身近な空間である「自分の部屋」について考える。

まず自分の住んでいる部屋を詳しく実測して、図面として描きあげる。これからの設計で必要となる、空間や家具のスケー



ル感覚を養うのが目的である。それをもとに、自分の部屋を「理想の部屋」にリノベーションする計画案を作成。自ら発想したアイデアを図面やドローイングで表現し、模型として立ち上げるという、インテリアの設計に於ける一連のプロセスを演習の中で実践する。

図学や製図、計画学といった基礎的トレーニングを積む前段階で臨む演習だが、それが却って自由な発想を生みだしていた。初めてとなる模型制作は、学生達が相互に協力しながら進めていたようであるが、様々な素材を試してみたり、細部を作り込んだりと、多くの学生が見応えのあるものをつくり出していた。

杉山香織さんの作品は、部屋全体の床を上げて大きなベッドのような柔らかい仕上げとし、部屋を訪れた人たちが思い思いにくつろげる空間としている。大胆な提案であるが、床や家具の落ち着いた素材感や、床下やロフトを収納として実用性を担保するなど細かな配慮が行き届き、実現の可能性を持ち得る完成度となっている。(西澤高男)

## 1学年 建築・環境施工演習

本演習は、蔵王連峰の裾野に位置する大学の立地を活かし、大学敷地と大学に隣接する都市公園および民有の山林をフィールドにした実地演習であり、環境デザインの考え方や、構造物を計画・設計・施工することで建設の基本事項を体験的に学ぶ。例年、林地の下刈り、枝打ち、間伐、発生材を利用した柵（樹木の細枝を編んだ柵）の施工、竹林の伐採と竹垣の施工、空石積みによる土留の施工等を通じて、自然から資源を得ること、それを材料として利用する人間活動の本質を理解する機会としている。また、草刈りや樹木の伐採を行うことで、意識して空間の変化を観察してもらう機会としている。今年度は園地の樹木の伐採や大枝の剪定作業が多く発生した。植栽から約20年経過したコナラが生長し過密になったこともあるが、前年度に降った重く湿った雪で枝折れ（雪折れ）が多く発生したことによる。また、更新（伐採して切株から枝を出させる）に適当な時期でもあったため、まとまった面積を伐採した。そのことで現地発生材が多く得られ、粗朶柵に利用された。学生にとっては初めての作業ばかりだが、グループで相談・意思決定することで、共同作業の方法も学ぶ。(渡部桂)





## 2学年 フィールドワーク入門

本演習では、実際の地域の環境（＝フィールド）で実践的に丹念に観察し、実際の現場から情報を集め、読み解き、整理する、そして誰にでも分かりやすく表現することを学ぶ。

本学本館の裏手（東側）にある古い民家とその敷地と農地、そしてその周辺にある西蔵王の素晴らしい自然や風土的な暮らしを営んできた集落文化を最大限に利用し、山形の地域自然、伝統文化、暮らしに触れ合う地域交流の切っ掛けともなっており、本学の実践的な環境を生かした非常に特色のある演習となっている。

「エクスカージョン」と呼ばれる観察ツアーを実施し、教員の解説を通じて「伝統技法による建築」と「周辺の風土環境」についての観察、考察の視点と知識を身につけ、「実測作業」で実寸大の建築や環境を学ぶ。これらの作業成果を第三者にわかるようにまとめプレゼンテーション能力を高める。また、グループ単位の共同作業によって成果を積み上げていくことも本演習の教育趣旨。

1年生前期の「建築・環境基礎演習」で観察、考察、表現の基礎、1年生後期の「建築・環境施工演習」で実際の原寸素材体験、これに続く2年生前期の本演習は、建築・環境デザインの基礎技術習得ステップの最終段階となっている。（田賀陽介）



演習地は農地、水路、山林に囲まれ、周辺環境との関わりを知ることが出来る



建物の外回り、農地を測る。実測風景



建物内部から屋根の隅々まで測る。実測風景



エクスカージョンで踏査する大学周辺の環境。農地、河畔林など、多様で豊かな土地利用と人の営みがある



## 2学年 現代の茶室

この演習は、本学科の学生が初めて建築を設計する課題であり、テーマは茶室であるが、伝統的な茶の湯の形式には一切とらわれる必要はない。木造軸組構法による雨風をしのげる空間を、四畳半の面積の中に収めることなどが条件となる。学生たちはそれぞれが思い描く、現代における茶を楽しむ空間を設計して



いる。伊藤ゆりさんの作品は、木造軸組と複雑な小屋組がしっかりと考えられており、また半地下に床を落とし込むことによって得られる視線の低さから地面を身近に感じて、日常的には経験のできない体験を得られる茶室を実現している。(山畑信博)

### 優秀作品「地面の茶室」

お茶を楽しむための空間があるなら、多くの人は窓から外の景色を楽しめる空間を望むだろう。この茶室では、低い目線で見る景色に着目した。地面の高さより茶室の床が低くなっていて、座ったときに目線の高さと窓から見える地面の高さが同じになる。普段見慣れている景色でも視点を変えると色々な発見がある。いつも気づけずにうっかり踏みつけてしまうような小さな植物たちを観察しながらお茶を楽しむことができる。(伊藤ゆり)

## 2学年 住宅の設計

山形エコハウスに隣接する敷地に計画する住宅の設計課題。一体はなだらかな傾斜地を造成した住宅地で、北西側に山形盆地を一望するが南東側には隣接する区画の擁壁が立ち、敷地自体も1.5m程度の高低差を有する。このような敷地条件をどのように活かすかが、計画の要点となった。大場いおりさんの作品は、敷地内に小さな畑を擁し、住戸内外が一体的となったアクティビティを生活動線として設定、これをきっかけに様々な場所を設けてゆくという平屋の住宅。環境の魅力を享受した住み手のライフスタイルが見えてくるような提案となっている。

(西澤高男)

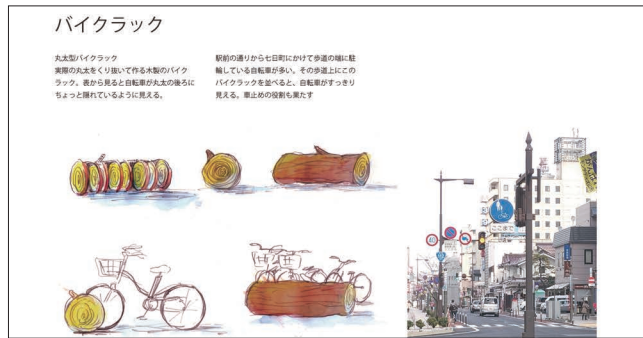
### 優秀作品「動きたくなる家」

定年を迎えた夫婦が、趣味を楽しむための住宅を考えた。土間をつくったことで外と中との境界を曖昧にし、住宅の中に3つの動線を設けることで、自然と家の中と外を行き来できるような空間にした。隣にあるエコハウスを意識し南向きに大きな開口を設け、さらにトップライトを設けたことで、採光を多く取れるように意識した。老後のスローライフを趣味のガーデニングや家庭菜園で楽しめるようになっている。(大場いおり)





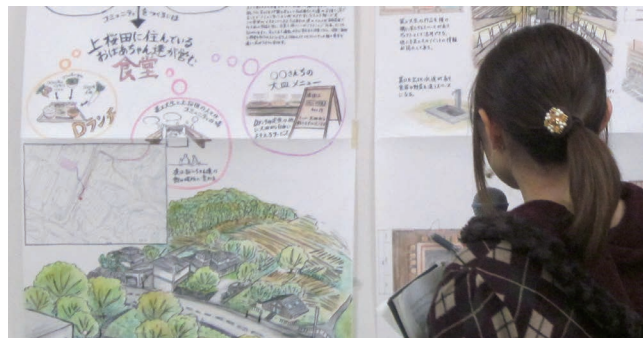
**mono marché** 山形の「ものづくり」を紹介する工房付店舗  
 中心市街地の空き店舗を活用し、山形の「ものづくり」を紹介する工房付き店舗のインテリアを設計する課題。敷地は1936年築のモダニズムの名建築、梅月堂ビルの2、3階である。今回で2年目となる課題だったが、ものづくりの現場や素材のリサーチと分析を通じて、ものの魅力を発信するのにふさわしい力作が揃った。武田彩花さんの提案は、紅花染めの魅力を反物の展示とそれらを用いたオーダーメイド工房との組合せで発信するというもの。カラフルな反物が目線の高さいっぱい広がる空間は圧巻。自ら現場に赴き、染色や裁縫をしながら得た発想には、相応の説得力があった。(西澤高男)



**バイクラック**  
 丸太型バイクラック  
 狭路の丸太をくり抜いて作る木製のバイクラック。裏から見ると自転車の丸太の後ろにちよっと隠れているように見える。  
 駅前通りから七日前にかけて歩道の端に駐輪している自転車が多数。その歩道上にこのバイクラックを並べると、自転車がすっきり見える。車止めの役割も果たす  
**自転車のための環境デザイン**  
 クルマ社会を変えるには、交通手段を自動車から他のものへ変えて行く必要がある。この演習では、そのツールとして自転車に注目した。自転車のもつ様々な価値や可能性を追求しながら、自転車が使いやすい街にするにはどうしたらよいかを提案した。道路空間のデザインにとどまらず、自転車が個人のライフスタイルやファッションの一部になるような“サイクル・スタイル”も企画した。優秀賞に選ばれた伊藤ゆりさんの作品は、現状の道路空間の調査と走行体験に基づいて、自転車のためのリデザインが現実的な形で提案されている。(吉田朗)



**食と農のまちづくり**  
 東北芸術工科大学のある上桜田地区を対象とした食と農をテーマにしたまちづくりは、農業を営む古くからの地元住民、農地を宅地開発してできた新住民、そして芸工大生という3者が、農地を活用して新たなコミュニティをつくることを提案する課題である。住宅地と農地の実態調査、そして住民へのヒアリングを丁寧に行い、調査して得た情報に基づいて提案を行うよう心掛けてもらった。また、提案は実際に学生が主体になって実施してみることを前提とした。今回は、青木陽太郎さんの極力無農薬で米をつくってという提案をもとに、環境に優しい米づくりを行っている。(三浦秀一)



**歴史と調和する小建築**  
 本学が所有する本館裏手の農地と農家建築の周辺を対象に、地域の歴史性、自然環境に調和させながら、現代的な地域の要請に答える小屋に準ずる小建築を計画する課題である。遠藤保乃香さんの作品は、丁寧な地域特性の読み込みの末に、悠創の丘の麓、芸工大の隣接地に上桜田のおばちゃんたちによって営まれる本学の第二食堂を計画し、地域の素材と温かなコミュニケーションを享受できるハードからソフトまでを網羅したユニークな提案である。手描きの鳥瞰図や内観パースなど味わいのある図面類や、期待効果までを検証した念入りな取組みが秀逸であった。(志村直愛)



住まい手が、まちのなかで社会とかかわりながら住む集合住宅の設計課題。敷地やその地域の於かれている状況を分析しながら、住まい手のワークスタイルやライフスタイル、そしてこのまちに住むことの意義を考え、提案することを求めた。

笠原さん・武山さん・渡邊さんによる案は、農業の六次産業化を目指す研修施設を内包した集合住宅の提案。散在する個室の中心に広がる吹抜の共用部に様々なスケールで設えられたキッチンや工房、市場などが、地場の恵みを糧にして山形に根ざした生活を営む魅力を顕在化した空間をつくりだしている。

(西澤高男)

#### 優秀作品「Dan-Dan 野菜でつながるまちのかたち」

私たちは、野菜を作る人、野菜を加工する人、野菜を提供する人が共に暮らし、働くことのできる集合住宅を提案した。野菜を中心に人々が交わる空間を、市場を中心に人々が暮らす小さなまちととらえ、生活と仕事、住民と客が密接に関わり合いな



がらも、快適に過ごせる空間を目指した。スキップフロアやインテリアを用い、プライベートでもパブリックでもない「ミディアムスペース」を作ることによって、空間の豊かさを見出している。(武山加奈・渡邊佳央里・笠原胡桃)

#### 3学年 近自然工法による空間デザイン

本演習は、大学近隣の一級河川「馬立川」を対象とし、自然界の物質循環や生物の生息空間を保ちながら土地を守り、人間の活動に対応する空間の設計を行う。昨年度までは「馬立川」の河川区域全体を計画対象地にしていましたが、今年度は高水敷および堤防において空間的余地が大きい箇所を設計箇所として固定しつつ、周辺に広がる河川区域以外の宅地、道路、農地、公園他緑地との環境的な連続、風景的な連続を意識した空間の提案を求めた。村上さんは、現地に生息するホタルを手がかりに、



調査結果に基づく生き物との共存空間を論理的に提案した。(渡部桂)

#### 優秀作品「近代工法を用いた河川改修」

計画をする上で、まずはその周辺地域を踏査し、その土地の近自然的な要素や植生の種類などを調べあげた。現地踏査でピックアップした近自然的要素を対象地に踏襲し、その土地に相応しい環境を提案することを目的とした。また、河川の現状と同様の水制効果を維持したまま、より自然に近い水流を再現するため、河川の施工方法は根固工と空石積みを用いた工法を採用。住宅街の中を流れる河川において、人と動植物、この二つの営みを分断すること無く一つの空間に落とし込むことができた。(村上大岳)



### こどもたちのまなびば

市内にある第四小学校の敷地を利用して、新築の小学校を建てる課題です。建物の配置、地域との連携、多様化する教育に対応できる大小様々なスペースの組み合わせなど小学校の課題で扱うパラメータ（要素）は多いし、それらは相互に関係を持っているので、よほどエスキースを繰り返さないとなかなかうまく収まりません。しかし、小野案はそれらをバランス良く解いた上で、空間のスケール感も非常に良かった。コンセプトもしっかりしていたと思っています。建築はそれぞれに関係する機能を扱うので、そこでの試行錯誤はとても大事なのです。

(竹内昌義)



### エコハウス

住宅の断熱の仕様から再生可能エネルギーの導入までを決め、建物全体としての断熱性能やエネルギー消費量を計算しながら住宅の設計を行うエコハウスの課題は芸工大の前に広がる上桜田の住宅地を対象とした。最初に現在に建てられている住宅を環境性能という観点で評価しながらも、住宅に対する現実的感覚を意識してもらった。志田敬多君の設計案は、冬季における南面窓から得られる日射取得を活かせるよう効果的な断面計画が施されている。熱損失係数は $1.1\text{W}/\text{m}^2\cdot\text{K}$ になり、暖房エネルギー消費量は標準的な省エネ住宅に対して44%削減されている。(三浦秀一)



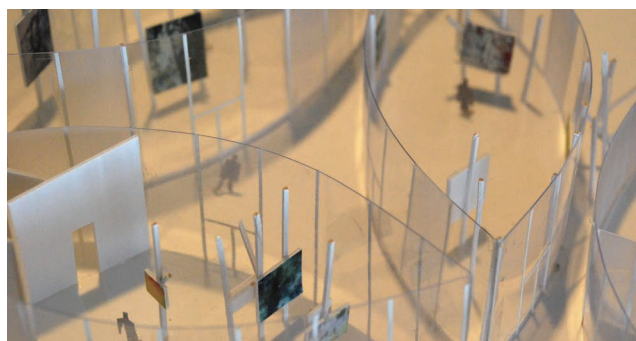
優秀作品 高梨光剛



竜山川流域の農地、山林、社を見学

### 殞(もがり)の森を再現する

「殞の森 (河瀬直美監督作品)」という映画がある。民家をグループホームにして暮らす老人と介護者が不思議な体験をするというもの。映画を通じてみえる、終末の暮らし、森や農地、周囲の環境、人との関わり、様々なイメージから、実際の山間部の空間に市街地の喧騒を離れ、静かな暮らしのある特別擁護老人ホームを山間部に設けるということを前提に、施設の考え方や配置、環境との調和、人の暮らし、風土的な関係性や空間的な繋がりを考える課題である。竜山川流域の横根地区を実際の対象地とした。中山間部の暮らし空間に死生に関わる時間軸を含ませた風景を形づくる素直な提案が多かった。(田賀陽介)

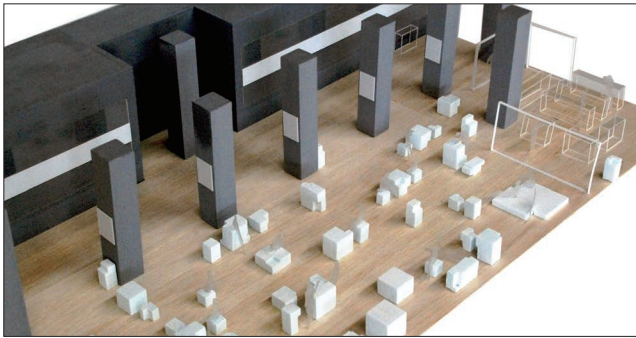


### 素材と風土で考えるギャラリーの設計

この演習では、風土を考慮したギャラリーを設計する。学生たちはそれぞれ、ギャラリーの主役であるアーティストとその作品と敷地を設定して、思い思いの空間をデザインする。その際、木造、鉄骨造、RC造などの構造の持つ表現と仕上げに至るディテールを検討する。渡邊佳央里さんの作品は、高校時代の美術の先生の作品を展示する場として、仙台市の公園内の雑木林の中に佇むギャラリーである。木の葉の舞う木々の間に溶け込むかのような内外の交錯したプランと木の葉をイメージした屋根から溢れる日の光が、居心地の良さを醸し出している。

(山畑信博)





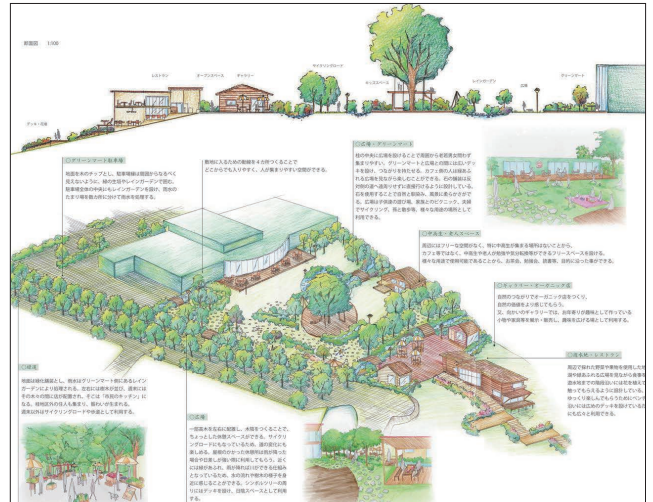
### エントランスのリノベーション

形態と時間と人の動きを複合的に表現しようとした作品である。あるルールに沿った複数の白いシンプルなキューブを配置することで、そこには多様な空間が生まれる。大きければそれは広場のようにあり、小さければ隙間と呼ばれる空間になる。人々はそこに座ったり作業したり、ときにはものは展示され、自ずと使い方を創造しようとする。その誘発自体が栗田知騎さんの意図である。また織り成す影が時間を表現している。シンプルだが知的で現実性のあるプランだ。(馬場正尊)



### 建築の遺伝子

近代建築を読み解き、その遺伝子を抽出し、新たな建築をつくるという課題です。三邊香里さんは、ミースファンデルローエのバルセロナパビリオンとメタボリズムを組み合わせ、立体的な建物を構想しました。ミースの自由なプランは二次元の方向性しかありませんが、垂直方向の軸を加えたのです。まさに21世紀の現代でも十分に通用しそうな空間が生まれました。実は現代的な建物は、自由なプランや自由な立面とともにエレベータの技術がそれを支えています。そういったことを考えるととても興味深い案だと言えます。(竹内昌義)



### ニュータウンのリノベーション

これまで日本の人口成長を支えてきたニュータウンは、急速な高齢化と人口減少に直面しその存続が危ぶまれている。この演習では、仙台市のニュータウンを対象に“ベッドタウン”と呼ばれる現在のニュータウンが“まち”として機能するためにはどのような空間が必要なのかを提案した。最優秀賞に選ばれた武山加奈さんの作品は、「市民がつくる市民の家」というテーマで、DIYのまちづくりが提案されている。子供の遊び場、中高生や老人が憩う場所、季節や風景を楽しむ場所、レインガーデンなど魅力的な提案が多数盛り込まれている。(吉田朗)

### 3学年 カフェでリノベーション

---

知的で実験性に触れる作品である。相似形のフォルムでも、その高さが30センチであればベンチと呼ばれ、70センチであればテーブルと呼ばれ、1メートルであればカウンターと呼ばれ、2メートルを超えると屋根と言われる。サイズと人間の認識についての問題を実際の空間で展開している。一見知的なゲーム



のように見えるが、作者は実寸の模型を作りリアリティーを持ってこの課題に取り組んだ。実際のもので作ってみると、理論では語れない素材の重量やモーメントによる歪みを体感することになるが、それがまた建築の面白さでもあるその両面性を体現した興味深い作品だった。(馬場正尊)

#### 優秀作品「KARI CAFE」

山形市七日町の住宅に付属している駐車場を借りながら移動していく「カフェ」の提案。高さが100mmずつずれていくスツールを、町の隙間とも言える駐車場にカフェや展示場、パブリックビューイングなどのコンテンツとして差し込むことで、外から来る人と、町に住んでいる人とのコミュニティが形成される。(藤倉貴史)

### 3学年 クルマ社会のリデザイン

---

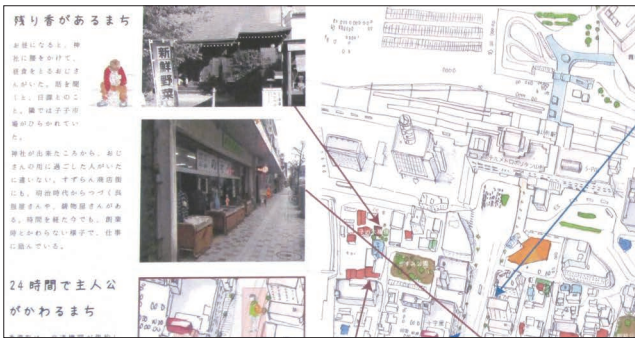
車社会が抱える様々な限界を踏まえ、次の新しい時代のライフスタイル、社会、まちを展望した。移動手段が自動車利用に偏るのではなく、個人の状況や選好に応じて自由に選べる「ユニバーサルな社会」を目標とし、それを戦略的に進めて行くための様々なアイデアをプロジェクト提案としてまとめた。最優秀賞に選ばれた志田さんの作品は、広幅員・多車線道路のリデザイン提案である。将来の自動車交通量の減少を見通して車線数を減らし、中央に公共空間を生み出すことで、広幅員道路によるコミュニティの分断の解消をねらった。(吉田朗)

#### 優秀作品「多車線道路の公園化」

車が中心になっている「車社会」から歩行者を中心に考えた「ヒューマンスケール」な街へ。対象地である山形市の羽州街道は車道の幅が必要以上に広く、歩行者の横断が困難だった。そこで、道路の中央へ遊歩道を設けることで歩行者は2回のステップで安全で柔軟に横断が出来ると考えた。交通規制を行うことで、オープンスペースとしてイベントなど多目的に利用することも出来る。また、交差点をラウンドアバウト化することで車の速度抑制につながると考えた。(志田敬多)

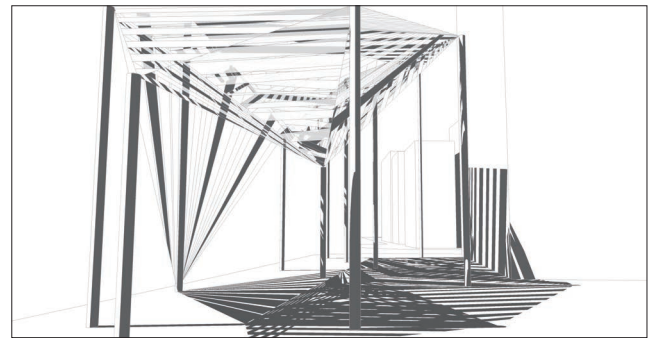






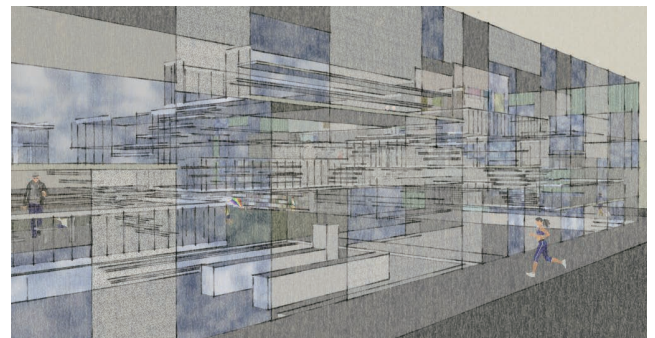
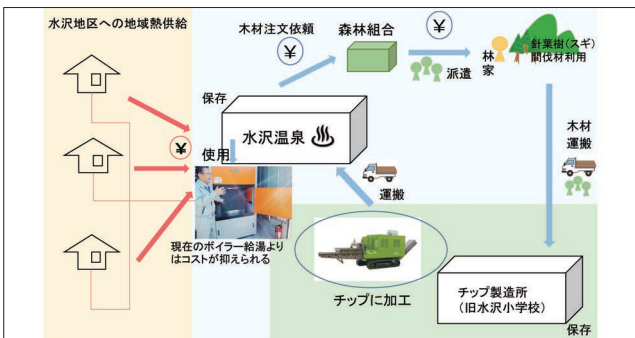
### 設計のための地域条件解説

自然、空間、生活、歴史の4軸から土地の文脈解説を行い、建築、空間設計の前提となる課題を各自で設定。プレゼンテーション改良を繰り返してその表現手法を学ぶ課題である。成田千里さんの作品は、山形駅前の香澄町を対象に特に生活と空間の関係に着目。24時間で主人公が変わる町と読み解き、人々の生活と空間利用が噛み合ず、すれ違う実態を指摘し、町に隠れた魅力を外部にはみださせる仕掛けにより様々な人々を絡めさせる提案を試みた。生活感漂う魅力的な人物スケッチと町の特徴を概観する鳥瞰図が巧みに提案効果を示し、説得力のある提案に仕上がった。(志村直愛)



### 建築とFORM (フォルム)

本課題では、的確な都市分析と形態：FORM(フォルム)を融合させた建築物を設計する。「無」の状態から建築の「形」と生み出す力を鍛え上げると共に、五感(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)を研ぎ澄ますことのできる空間提案を目指すこと。栗田知騎さんの作品の特筆すべきは、建築へのまなざしと着眼点にある。構築物から生み出され、刻々と表情を変え、移行する「影」。その予測不可能な立ち現れ方に、建築の新たな可能性が垣間見える。課題を進める上でとても重要な「決断力」、さらにはナイーブかつ秀逸なプレゼンテーションも高い評価に値する。(八重樫直人)



### まちの自然エネルギー計画

西川町は月山から大井沢まで広がる広大な区域を持ち、森林面積率が9割にも達する。その一方、過疎化の進行は著しい。演習はこの森林資源をエネルギー利用しながら地域の活性化に結びつけていくための提案として、西川町全域に渡る森林エネルギープロジェクトマップを作成し、その中からより具体的な内容まで検討した重点プロジェクトを提案してもらった。庄子くるみさんの提案は町内の水沢温泉に木質チップボイラーを導入することであった。廃校をエネルギーとなる木の集積場所に利用しながら、普及啓発活動の拠点とするという複合的な利用を目指すものであった。(三浦秀一)

### 劇場と広場

街の風景をぼんやり映し込む劇場のファサードは、時に儚く、時に圧倒的な存在感を示す。時間や天気、内部のアクティビティによって建築の表情はさまざまに変化するだろう。街に感応する美しい建築だ。この課題に対する一般的な回答は街と劇場を広場がつなぐのだが、鈴木美沙さんの作品だけはまちと広場を劇場がつなぐという構成になっている。コの字型の薄い劇場がスクリーンのような機能を果たし、まったく新しい表情を街にくわえている。劇場の内部を動く人々の姿がうっすらと外からも見え隠れし、それがまた新しい街の風景として溶け込むだろう。コンセプチュアルでポエティックな作品ながら、プランもしっかり練りこまれた秀作だ。(馬場正尊)

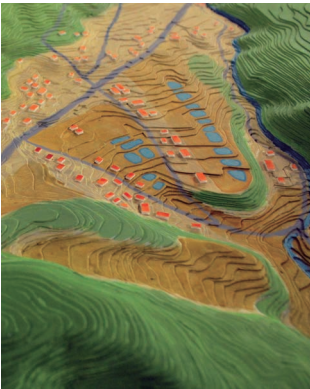


## スタジオ総評



### 人口減少社会の公共施設

山形駅前の広場に山形の「観光」を考えるという課題。ありきたりの観光ではない、日常やエネルギーをテーマとした観光など、幅広いテーマが寄せられました。その中で、砂庭陽子さんは東北6県の違いを各県で展示をするという提案をしました。これらの建物は仮設で、状況に合わせて伸縮するシステムを持っている。そういった外部と内部が入り混じったバザールの空間は、現実の今の山形にもっとも求められているものかもしれない。課題としてだけでなく、現実でも通じる案で、造形力、まとめる力ともに優れていました。(竹内昌義)



優秀作品 高梨光剛



竜山川流域の農地、山林

### 中山間部集落の風土的な暮らしの地域計画

昨年に引き続き、中山間部の暮らしを背景とする課題とした。中山間部の自然や文化、環境の価値は誰もが認めるところだが、現代人は文明の利便性を求めて山間部での暮らしをやめ、低地部に移行している。しかし、中山間部のあり方はこれからの社会の大きな課題である。自然と集落の暮らしの価値や利点と不具合を整理し、新規の暮らしや土地利用の提案を求めた。

大学付近の竜山川流域（集水域約14km<sup>2</sup>）を提案対象域とし、岩波集落、横根集落、八森集落を中心に計画対象区域を受講者各自が定め、意欲的に景観、土地利用、暮らしについて広域な計画提案を行なった。(田賀陽介)

小スタジオ制は定着し、そのなかで少しずつ展開しています。スタジオはほぼすべての教員が受けもつのです。いわゆるデザイナーではない教員も担当していますので、課題の設定も含めて任されているので様々な課題が可能となります。最後のカタチをつくることを急がせず、その過程を積み重ねるスタジオだったり、グループのディスカッションで一つの結果を導き出すスタジオなど、様々な体験をしてくれるとしたら、この方法の効果があつたといえるでしょう。

また、地域の人たちのヒヤリングを取り入れているスタジオもあります。地域に根ざす大学として、人々のリアリティに触れながら課題を進めることは意味深いです。山形の人たちは大変温かく、私たちの稚拙な話にも、真剣に耳を傾けてくれます。それによって導かれるプロジェクトも現実的であるため、派手さはないのですが、かえってそれがいいと思っています。



模型

軽度の知的障がいのある人が、地域の人と交流する中で社会へ徐々に出ていく手助けとなる暮らしの場を設計した。機能はグループホームと作業場、店舗、親と泊まれるゲストルーム。場所は山形市の七日町で、道路に面し、御殿堰の芝生に隣接する敷地に設計する。グループホームごとに庭を設け、道で繋ぐ。庭を介して地域の人との交流が生まれる。また、庭では花を育て、それを作業所で加工し、店舗で販売する。

地域の人との接点を徐々に増やし、地域で暮らしていけるステップアップしていける場を提案する。

#### 講評

長谷川綾の作品は七日町の御殿堰近くに、障がい者のための授産施設を構想したものである。忙しく働いて疲れている一般人とゆったりとした豊かな時間を過ごす障がい者のふれあいがテーマである。デザインしているのは、その接点である街区を通り抜ける道路、そこでの視線の交錯。丁寧に描かれたパースを見ても、一見、おとなしい切り妻の住宅群の模型を見ても、やさしい雰囲気伝わってくる。だが、そこを通して表現したいことは、現代に対する痛烈な批判である。(竹内昌義)



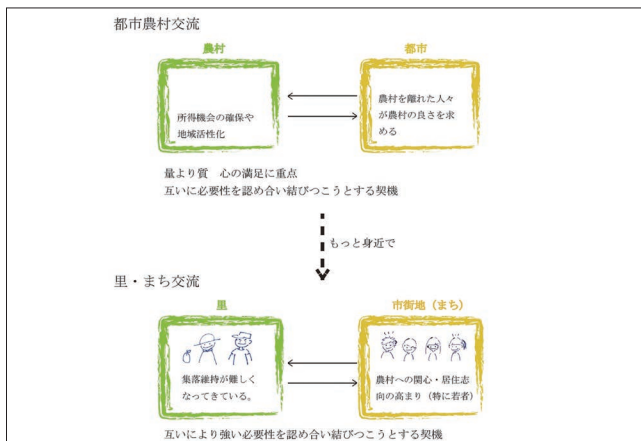


調査実験「おばあちゃん家に行こう！」

私は高齢化が進む農村と、その子や孫が住むまちの交流において、孫にできることがあるのではないかと可能性を探ってきました。私たち孫が、友人を連れて祖父母が住む地域に行くことで、地域資源や歴史的な魅力を再発見し、双方で気持ちの受け応えをすることができます。この交流は、日常性と継続性が期待でき、また観光とは違うより深い交流がうまれます。農村が継承されにくくなっている今、新しい視点から農村の暮らしや文化をみることができ孫がキーパーソンであり、農村とまちの交流を活性化させる可能性があると分かりました。

講評

地方では少子高齢化、人口減少を起因とした現象が身近に見られる。特に中山間地域では、若者世代がすぐに行き来できる近くの都市部に流出し高齢化率をあげている。鈴木は、自宅から車で1時間の農村に祖母が1人で暮らしている。祖母の経験と知識、暮らす土地の意味や価値を、当地との関わりを深めて引き継ぎたい、そんな純粋な願いで研究を始めた。「孫」や「孫世代」は村を出た親世代とは違う価値をそこに感じている。そこを繋ぐことが研究の視点になっている。このテーマは特効薬ではないが、地方の現状打破に刺さる鋭さがある。(渡部桂)



里・まち交流のイメージ



展示風景

長谷川、鈴木に続いて、ここに紹介する3人も全員女子だ。(建築・環境デザイン学科は男女比がほぼ半々なので、ぜひ男子も頑張ってもらいたい。)

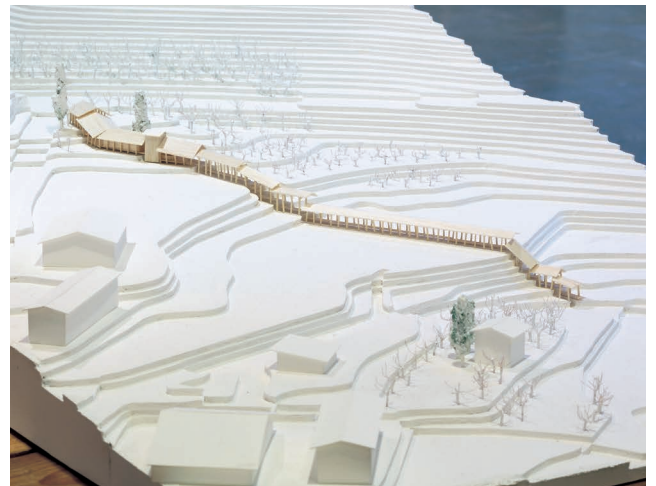
それぞれが特徴的な作品をつくったので、それぞれ説明しよう。

庄司案は芸工大のある里山の八森という場所をテーマに、その場所の簡易水道を保護する屋根をつくることで、そのこと自体を可視化し、無意識に沈んでいたものを顕在化するようなプロジェクトだった。

鈴木案は、市街地にある病院をシェアハウスにリノベーションしたもの。病院が見事に住宅になっていた。一般的には病院の機能的な空間が、住宅にするのには冷たい印象を受けるが、模型を細部までつくることで、そこでの楽しいライフスタイルが伝わってきていた。

古山案は、月と私たちの生活の関わりについて研究したのち、月とともに「住む家」を提案した。12人の住人が、円形を放射状に区切った住戸にすみ、それぞれの部屋から月をみることができ、うつろいゆく過程で、時の過ごし方を提案である。

どの案も現実と理想の間の中で、最終的に形にするべく、相当苦勞した形跡が見受けられたが、表現としても、プロジェクトの内容としても大変素晴らしいものだった。



「現代の中山間地域における『水』と暮らしの結節点」庄司はるか



「地方都市におけるストック利用の住まい方—廃病院のコンバージョン—」鈴木いつみ



「月と生活—地球のリズムに準ずる人間の暮らし—」古山紗帆



## 高島町ワクワクまちづくり協議会



火と肉とお酒で盛り上がる「ストリートBBQ」の風景

山形県人材連携強化事業採択（2010-2012）を経て、2013年度からは中心市街地・商店街活性化支援事業の補助を受けている。街の特性を活かす活動の実験を繰り返しながら徐々に自己資金を獲得する方法を考え活動している。昨年度より、街中の特性である広い道路を活かして町民が集い楽しむ行事として「ストリートBBQ」を企画し、今年度は本格的に開催した。

売上げがまちづくり活動の資金になるねらいもあるが、本質は、街中の空間を使い楽しむこと、協議会会員も含め住んでいる自分たちが楽しめる行事を自ら企画し実施することにある。協議会は、これまで中心市街地の3つの商店会の若手経営者で構成されてきたが、ここ数年で商店会を超えた会員の参加も増え、組織としても成長している。特に「ストリートBBQ」では、郊外農家の生産団体の協力も得られた。街場はそこに住んでいる人だけのものではなく、そこを訪れる全ての人に開かれた場所になるべきであるという協議会の意識が少しずつ形になってきている。今後は、これまで続けてきた町のシンボルである旧高島駅舎周辺空間の活用、街中に人が訪れ楽しむ機会の創出、独立的な協議会運営に向けた収益事業を実施しながら、それらが創り出す空間やシーン、サービスが一体となって「高島町らしい風景」となるよう次のステージの計画をまとめる。



広幅員の道路は広場の可能性を秘める

## 気仙沼みらい計画大沢チーム

震災から3年が経ち、三井物産の補助を受けての活動は最終年である。現地では土木系の復興工事は佳境を迎えた。三陸道の建設工事、高台移転のための造成工事が進み、B地区に関しては災害復興住宅が建ち始めた。住宅相談会で相談されていた住宅も幾つか姿を現し始めた。月に一回行われているみらい集会は、ゴミ置場の位置や公園のあり方、街並みについて話し合わせ、それぞれの地区の完成後の様子が確認された。地元の子供たちと大沢カフェでは学生が企画するカエル教室が行われている。

お祭りなどの年中行事への参加、設計に関して専門家が無料で相談に応じる個別の住宅相談会の開催、同時に建てることでできるだけコストを安くしようと考えられた共同購入の検討など、気仙沼みらい計画大沢チームの活動は多岐にわたっている。また、大沢カフェの運営、地域の特産を活かした活動のためのまちづくり会社に関して、検討が始められている。

そういった中、国道が河川の防潮堤より高く設置されることになり、道路の高さが変更されることになった。その結果、国道のすぐ脇に建てられていた、地域活動のための大沢カフェの移転しなくてはいけないことがわかった。



みんなで作ったデッキでくつろぐ大沢カフェ



防潮堤の高さの検討など様々な活動が行われるデッキ





雄勝町鹽竈神社例祭。集落の人達だけの行事に参加



例祭後の直会。震災後、離れ離れになった集落の人々の年に一度の集まりであり、拠所となっている大切な年中行事に参加させていただいている

東日本大震災年から「TRST 東日本復旧復興計画支援チーム（以下、TRST）」は主に雄勝町（石巻市）明神地区の支援活動を継続的に行わせて頂いている。2011年8月以降、明神地区の村社である鹽竈神社のアプローチとなっている石段の修復、打上げられたゴミの処理、草刈り、周辺林の間伐をはじめ、年中行事として正月を迎えるにあたっての注連縄やお飾りの設え作業などを継続的に行ってきた。また、明神地区の墓所が高台の斜面地にあり、震災時の影響とその後の降雨により地所の地崩れなどがあり、地区の方々からの要請を受けて、修復にあってきた。

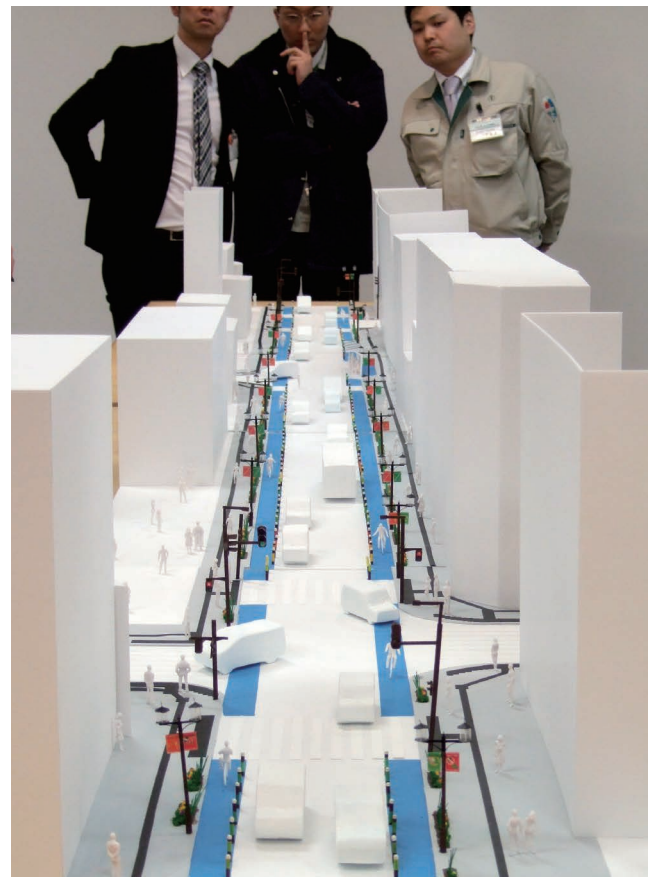
こうした明神地区の方々との交流と活動の継続が評価され、2014年、鹽竈神社の例祭に参加することを許され、TRSTチームのメンバーは4月25日の例祭行事の準備作業と祭事に参列し、例祭後の直会を共にさせていただいた。

現在、明神地区は高台移転の住戸宅地造営の予定もあるが、ほとんどの人々が雄勝町に戻ることができず、内陸部や都市部へ移住している。

震災後、鹽竈神社例祭は、年に一度の唯一の明神地区の人々の集まりとなっており、離れ離れになった年配の方々の楽しみとなっている。心の拠り所としての鹽竈神社の存在、明神地区の風景の存在は大きな意味を持っている。TRSTではこうした状況を踏まえて、風景の修復に今後も取り組んでいく。

山形市中心市街地のまちづくり団体である「ほっとなる通りまちづくり協議会」（七日町・本町・十日町商店街、国土交通省、山形県、山形市、山形県警で構成）とタイアップし、まちづくり提案を行うプロジェクトである。この協議会は月一回のペースで行われ、その場に学生が加わり、自分たちの提案をプレゼンテーションし、議論に参加するという実践形式をとっている。平成26年度は、建築・環境デザイン学科3年生を中心に20名ほどが参加した。

平成26年度のテーマは、「ほっとなる通り」のリデザイン提案である。「ほっとなる通り」は、現在、自転車道の社会実験中であるが、平成27年度には本格実施することが決まっている。そのため、平成26年度中に自転車道の設計を行うとともに、バス停、ボラードなどストリートファニチャーを含む道路空間のリデザインの提案を行うことになった。タウン・ワークスは、現在の自転車道の形態を踏襲しながら、ボラード、舗装、雨水を浸透させるためのレイン・ガーデンの設置、サイン計画、ストリートファニチャー、バス停など道路空間の総合的なデザインを検討し、1/50模型を作製した。今後、住民向けに模型の展示を行う予定である。



完成した1/50模型は関係者の間で好評を博した

## 北海道江差町「職人蔵」 セルフリノベーションプロジェクト

北海道江差町の海岸添いに広がる旧市街地「歴まち地区」は江戸時代の北前船交易で栄え、今も当時の歴史や文化が色濃く残っている。鯨漁の活気が途絶えて久しいこの地区では歴史的建築物を活かした町並み整備が進められたが、過疎化や少子高齢化が続き、早くも空き店舗や空地が目立ち始めている。

このような中、民間が所有する江戸時代建立の土蔵群の解体・売却が進められることが分かり、貴重な歴史的建造物喪失を防ぐために地域のNPOが働きかけ、江差町が当該土地・建物の寄付を受け、コミュニティカフェの整備とあわせ、地域産の材料や技術によって付加価値の高い製品を生み出すためのワークインレジデンス拠点施設「職人蔵」として活用することになった。

NPOの手によりコミュニティカフェが実現した段階で、学科ではまず職人蔵リノベーションについてのマスタープランをつくり、まず自分たちの手で短期に実現可能な家具と照明演出の制作を行った。家具は北海道檜山振興局営林課の協力を得て、職人蔵をはじめ歴まち地区一帯で利用できるストリートファニチャーを、簡単に組み立てられるキットとしてデザインした。また、照明装置の無い蔵やトオリニワを演出するための照明装置を設置、イベントに活用した。

本計画は「蔵を工房として使用してみる」という行為自体を実験的に内包したものであり、今後も地域の方々と協働しながら継続してゆく予定である。



地産材を使った工房用家具製作の様子



通りの裏側に残っていた江戸時代建立の蔵の内部

## ツリーハウスプロジェクト



栗の大樹に作られた開放的で眺めの良い六角樹

今年度のツリーハウスプロジェクトも多くの新入生を得て活気にあふれていた。春のオープンキャンパスでの五号樹は、初めて球形に挑戦した。竹を裂いて球形を作り出そうとしたが、曲率を合わせる作業に学生たちは難儀していた。夏に開催したイベントでは五号樹を進化させて、曲面に布を張った風鈴のように涼しげな〇型のツリーハウスができあがった。メインのイベントは朝日町にあるAsahi自然観の入口付近で製作した六角樹であった。地元の空気神社や蜜蝋に因んで、蜂の巣を想起させる六角形のフレームを、空気の流れるように透かしたまま栗の大樹に吊り下げた。眺めの良い樹上での一杯のコーヒーは至福であった。併せて蜜蝋によるろうそく製作やキャンドルナイトイベントの器絵付けのワークショップを行った。また、今年度の〇型の五号樹と、昨年度のオープンキャンパスでの△型の参考樹、大江町のCBJ会場で作り上げた□型の四号樹を合わせた「ツリーハウス〇△□」を、東京芸術大学で行われた日本図学会全国大会に出展し、代表の砂庭陽子(3年生)が来場者に説明を行い好評を博した。多くの方々の支援を受けながら、企画・設計・施工と、段取りを考えて創り出すツリーハウスプロジェクトは、学生にとって楽しみであるとともにプロフェッショナルへの糧となっている。



## 山形R不動産



農家の倉庫をリノベーション。学生自らデザインし、つくりあげている

山形R不動産は、地元企業、千歳不動産と大学が連携しながら、山形のまちなかの空き物件を再生する産学連携のプロジェクト。学生達とは、これまで10以上の実際のリノベーションを、手掛けている。

「山形R不動産」というウェブサイトを運営しながら、まちなかの空き物件をリサーチ、それをどう変えていくかの提案を行う。そこから生まれてくる実際のリノベーション設計の仕事を学生たちが中心となって進める。学生時代からリアルな設計・監理の現場に関われるのが特徴だ。この経験を活かしてリノベーション・デザインの企業に就職していった学生たちも数多くいる。仕事生まれる瞬間から、それをどう実現するか、社会との関わりはどうかなどを試行錯誤しながら取り組んでいる。

今年は山形の郊外にある農家の倉庫を、地域の人々のコミュニティスペースに改装し、学生達のセルフリノベーションによって、空間を蘇らせた。

現在、単体の建築から、街へと面的に活動を展開し、街を変えて行くエンジンとしての役割を模索している。地方都市における大学の関わり方、情報発信の仕方、そしてリノベーション・カルチャーの醸成など、「山形R不動産」というメディアを軸にして活動を行っていく。

## 中学生のためのワークショップ

6月の土曜日に山形市内の中学校の生徒を対象としたイベントとして、東北芸術工科大学の各学科の学びを体験する「中学生ワークショップ」が実施された。志村研究室が建築・環境デザイン学科の体験を担当し、歴史研究室の特性を活かして「模型でつくろう、やまがたの歴史建築！」を企画実施した。これは、県内にある歴史的建築の簡単な紙製模型を準備し、基礎講義に引き続き、学生アシスタントのアドバイスを受けながら生徒各自が切り貼り作業により自由に模型を制作、全完成作品を整列させてまちなみをつくり、そのまま作品講評会を行なうというものである。ケント紙による模型は、羽黒山五重塔や山形市内に現存する2種の土蔵、文翔館と長井市の丸大扇屋の5種を1/150の共通縮尺で型紙を設計。敷地となるボードも用意したところ、準備しておいた樹木や草、石、砂といった素材を使って庭園や植栽を制作する生徒もおり、ゼミ学生の支援も手伝い想像以上にハイレベルな仕上がりを見せた。最後は同じスケールのNゲージ鉄道模型や車、人形などのジオラマの中に全作品を配置して縮尺比較を学びながら講評を実施、中学生からも好評であった。歴史建築の魅力や実態を市民にいかに関え理解を得るかを考える実験的な取組みとして、歴史研究室としても学びの多い非常に有意義なイベントであった。



最後に各自で完成させた模型を並べ、作品講評会を開いた

## プロジェクト



### 大江町国選定重要文化的景観の保存計画に基づく建築調査

山形県大江町左沢地区は中世近世の城下町であり、当時から地割の上に最上川舟運で栄えた歴史的な商家や蔵などが建ち並ぶ景観が残り、2013年に国の重要文化的景観に選定されている。志村研究室では、本年度、昨年度までの選定のための支援調査に引き続き、保存計画に基づいて地区内に建つ重要な構成要素となる25件の歴史的建造物の実態把握と保存準備のための調査を受託し、建物の実測調査及び現状評価調査を実施した。調査を通じ町の皆様と共に町の誇りを発掘し、守り伝えるお手伝いができることは学生達にとっても貴重な実務経験である。(志村直愛)



### 奥会津地方三島町早戸地区石積実習活動

福島県大沼郡三島町早戸地区での石積実習作業は、2011年以降は豪雨災害の復旧活動を経て、継続的な温泉施設の遊歩道の整備と地域交流となっている。全体的計画は、昨年より遊歩道の復旧事業から遊歩道の先にあるJR只見線早戸駅舎に繋がる歩廊の延長計画に切り替わりつつある。引き続き地元企業である佐久間建設工業株式会社と共同させて頂きながら、今後は福島県の土木事務所との連携も図りながら、官民学による実践的な遊歩道活用の計画の展開を検討していく予定である。より実践的な地域との関わり、計画や施工、環境との調和の経験を高め、地域社会に有効な人材育成の教育効果を図っていきたい。(田賀陽介)



### 小屋づくり

本プロジェクトでは、山形県金山町の旧林業センターを拠点に、学生たちが自由に改装・創作活動を行っている。昨年に引き続き「滞在できる空間」づくりの一環として、水回りの充実を図った。一昨年から使用しているドラム缶風呂を、屋内の風呂場に常設して利用できるように改修工事を行った。また、1階の吹き抜け部をギャラリーとして利用できるように、現在の蛍光灯の照明をスポットライトに替える工事を進めている。さらに地域の人たちと触れ合える「マルシェ」の開催を目指して「りんご箱」を設置し、来年度の本格運用を目指している。(山畑信博)



### 蔵プロジェクト

上山市榎下宿にある「山田屋」の蔵では、学生たちが地元の方たちと意見交換をしながら、改修工事とイベントの企画・実施を行っている。夏のイベントでは「榎下さんぽ」を実施し、訪れた人々と榎下宿を散歩し、写真やスケッチに収めて蔵で展示した。秋には「お茶のみまじゅらっしゅい」というイベントを開催した。けん玉やお手玉で地元の子どもたちとふれ合い、また地元の方たちも蕎麦打ちなどを行い、蔵プロジェクトのメンバーが始めた活動が地域の活性化に寄与している。また、東根市の蔵の掃除と実測、活用提案も併行して行っている。(山畑信博)





「環境的未来型」 畠山直哉氏講演会

2015年1月7日、陸前高田市出身の写真家、畠山直哉氏を迎え、2014年度環境的未来型「故郷を撮る」が行われた。

1996年に木村伊兵衛写真賞を受賞するなど、世界的に活躍する写真家である畠山氏は、東日本大震災により変わり果てた故郷を、撮り続けている。

震災から約4年が経ち、私たちの記憶が、鮮明さを失いかけている今。畠山氏は、本講演会で、震災直後から現在に至るまでの写真を用い、時間を遡るという手法を試みた。

時間を遡るごとに、残酷さは増していくが、写真は美しさを持ったまま、ただただ、現実を捉えていた。時々発せられる、畠山氏の誠実で、欲の無い、穏やかな語り口から、大きな出来事をそっと見つめる視線と、絶望と共に、静かに流れる月日を感じた。

「故郷以外の写真を撮っていない」と語った畠山氏。これは、作品なのか、記録なのか。それすらも打ち消される現実と、あるがままの姿として映し出される震災への恐怖。畠山氏は、私たちに、何も問いかけてはいない。失われた故郷を前に、ただ佇み、かつての記憶と、現実を捉え続ける畠山氏の心の中に、故郷はどのように写っているのか。

この日受け取った、写真と言葉は、私の中で、今もまだ、静寂と共に残っている。(コーディネーター 佐藤あさみ)



最優秀作品 成田千里

「ONE DAY PROJECT」 蟻塚学氏講演会

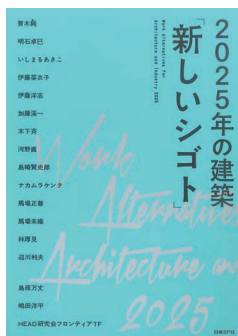
建築家、蟻塚学さんから与えられた今年のテーマは「美しい建築」である。このテーマはとてもむずかしい。「美しい」は客観的なものと考えられるが、実は結構主観的なものだからだ。蟻塚さんはその定義を広げるべくテキストを添えられた。

「美しい建築」を設計して下さい。

ひと言に「美しい」と言っても、この言葉は様々なとらえかたができます。外観や空間が意匠的に抜きん出て優れていることも美しいでしょうし、取り立てて優れたところがなくても周囲の景観や環境にぴったりとなじんでいることも美しいと言えます。もう少し深く考えると、使う人の動きと完璧にシンクロした機能的な空間や、住まい手に美しい暮らし方を提案するような深い洞察力をもった家も、そのありようとして美しいと言えるでしょう。もしくは、地域コミュニティの活動をサポートしたりまったくエネルギーを消費しないような住宅も、現代においては美しい建築として考えられるかもしれません。

自分の中の感性や社会性の中から、あなたなりの「美しい建築」を想像し提案して下さい。

最優秀の成田千里案は、揺れ動く時間の中の情景をイラストで切り取ったメルヘンなもの。特出した画力が建築のあり方の魅力を伝えていた。ただ、建築はモノとしての側面を持つ。イメージをどう定着させていくか、様々なものを選びつつ、捨てなければならない。そこに対しては未到達だが、それを支える感性が大切であることがよくわかる作品である。(竹内昌義)



日経BP社  
2014年12月16日  
ISBN 978-4822274917

2025年の建築「新しいシゴト」 馬場正尊/青木純/明石卓巳 ほか  
建築業界は空き家が15%に達しているにもかかわらず、あいかかわらず年間100万戸ペースで新築をつくっている。建てられる個人住宅は画一化し、誰もが手に入れられるようにローコスト化が進む。ストックが十分にあり、人口が減りつつある現在、今までどおりのやり方ではなく、新しい働き方が求められていると思う。この本に登場するそれぞれの人は、自らリスクを背負い、小さな実践を積み重ねられる人。既存のやり方に飽き足らずに、あるいは疑問を抱いて、一歩踏み出した人だ。自分たちの将来を考えながらぜひ読んでみよう。



晶文社  
2014年8月23日  
ISBN 978-4794968555

日本のカタチ 2050 竹内昌義/馬場正尊/マエキタミヤコ/山崎亮  
2050年になると、地方の人口は大きく減少し、ほぼ半減する。マスコミでは「消滅可能性都市」という言葉が語られたりしている。そういう時代はどういう時代なのだろうか。竹内は地域とエネルギーの話、馬場正尊は2拠点居住など暮らし方についての話、マエキタミヤコは政治的な合意形成の話、山崎亮はコミュニティデザインの話をとおして、その時代を予測した。それは特に悲観的なものではなく、状況を最大限に活かす楽観的な未来だった。2050年は学生の皆さんにとって、もっとも働き盛りの頃なので積極的に未来に関わってほしいと思います。



東北芸術工科大学 デザイン工学部

## 建築・環境デザイン学科 年報2014

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2014

発行日 2015年8月1日  
編集 海谷香里 竹内昌義  
構成 倉地亜希子  
書式设计 株式会社GKグラフィックス  
印刷 田宮印刷株式会社  
製本 田宮印刷株式会社  
発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科  
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

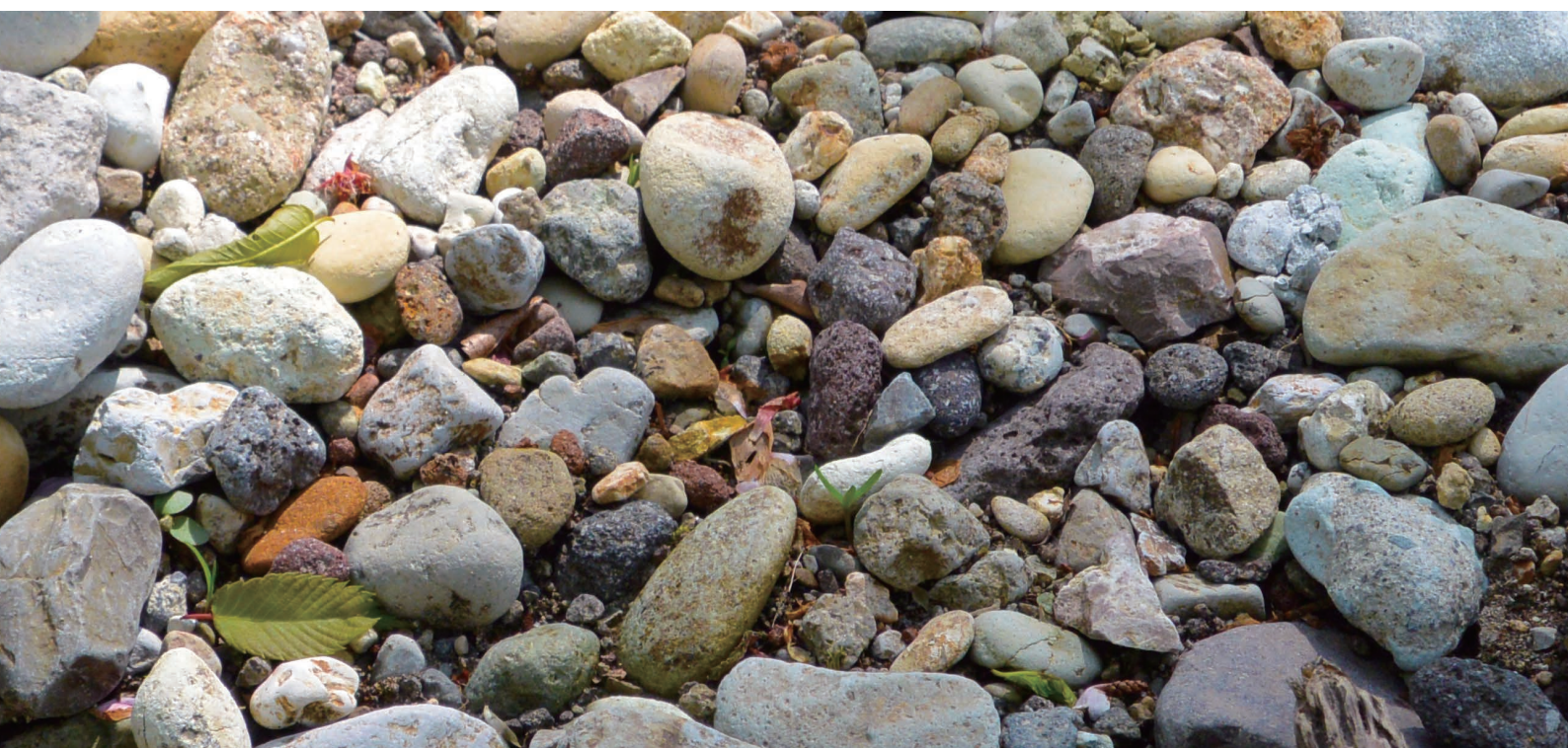
Tohoku University of Art and Design  
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail [nyushi@aga.tuad.ac.jp](mailto:nyushi@aga.tuad.ac.jp)



東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail [nyushi@aga.tuad.ac.jp](mailto:nyushi@aga.tuad.ac.jp)